

和歌：文苑

著者	稼堂，東園のあるじ，巴城生，本田，弘，石橋，愛太郎，福地，虎雄，溪川，學人
雑誌名	龍南會雜誌
巻	35
ページ	48-50
発行年	1895-04-05
URL	http://hdl.handle.net/2298/4551

堅かればなりげにも、この心を推去もてゆるばなごう賢き人の列つらにも敷まへられ
ざらむ。さても一枚まいの書をたにも、かうやうの誠の至らむ、さすがに、昔の人なりけり。
甚いひじく尊し。こゝらの人、口々にころ、さはいはゆ。いろでか聞くとも及びいたらむ、思
ひて、顧みれば、汗あゆる心地ぞしける。どて、ろの人の本末をも、いひ聞かすれば、かし
こしや、さりとは、我が身ながらあさましくころ、晨つとむて煤すすをおとして、きよめ侍らむ
といひ居たる、誠みえて、いとうれま。

二月の十五日炊事紀念會によみて遣しける 椽

堂

あさあゆふあをりたく柴の煙にも末の世かたゞ盡きすやあるらん

事にふれて涙あからによめる

事ことにうへらぬ人のあとゝめてたもひいやます涙かはかあ

貴田氏の母刀自より鶯宿梅一枝ををりてたくられけるをよるこひ
てよみて遣しける

鶯の来てわろ宿をとひもせまどふども我やよきにこたへむ
我が宿にくるよしもかき鶯のすむてふ梅の枝よひかかれて
七重八重さく梅かえのめつらしき花をまつまの心つくしに

阿蘇の社にて國賊追討の 綸旨と螢丸の刀とをみ侍りける時によ

東園のあるじ

める

この勅うけて斃れしこの人のたまこころひかれこの螢丸

波野原をすきて

行く人もあみ野の原の花すゝきほに出てゝたれをうち招くらん

宇佐宮に詣てゝ

うさの宮とこかしこみ詣てけん心ま思へは涙流るゝ

將士の勅語よ對する奉答文を讀みて

硯友會員 巴 城 生

大君のみことかしこみいやましにとこゝろおこす大和ますらを

哨兵の苦を想ひて

ふりつもる雪を雪どもものゝふの思はぬもはたものおもひなる

春 雨

硯友會員 本 田 弘

しつか屋の軒の玉水音のして淋しさまさる木の芽春雨

折にふれて

朝日影のほるにつれてきゆるかき唐野をこめる八重の村雲

春の朝

硯友會員 石橋愛太郎

池の面のこほりもとけて青柳の髪梳つる春のあけほの

鶯誘人

花になく里のうくひす人來やと今は軒端に友さるふあり

春日偶詠

硯友會員 福地虎雄

梅か枝をつたふりた野の春風によろの袖さへかをりぬるかを

探梅

梅か香にいつこどもなくさるはれて知らぬあるしの宿をどひけり

春風

さく花に睡るこてふの夢をたにさませとやふく春の山風

別れし師に送るたる文のはしに

硯友會員 溪川學人

直すへき人もあらねはこの文をこのまゝ君にたてまつるかな

をりにふれて

よみ人まらず

花鳥に春はこゝろのあくかれて學の道もおくれからあり

恭賀家大人七十序

舊作

教授

内田周平

島田篁村曰、起手
簡單全篇

君子之處世、操持其志、順承乎天、窮而無諂、達而無驕、卓然獨行、終始惟一、如此而已矣。而以其志行與流俗不同也。往々罹憂愁窮厄之苦、而屈辱於陋巷之間。此人事之或然者。豈其天意乎哉。顧元治慶應之際、家嚴連病、姉及姉夫早歿、慈闈與伯兄、艱辛窮約、以營生業。